

それより幾年、求願は救民に一生を捧げ、決して名譽にあこがれず、あくまで無の一字に哲するよう心がけ、滝村青龍寺に来て住んでいた。

時に祐天が芝増上寺の大法丈になつてしていると聞いて、彼は誓いを破つたな、彼と面会して見ようとわざわざ江戸に上つた。増上寺に行つて住僧に面会を申込むと、「ここをどこだと思ふか。かたじけなくも徳川家の菩提所だぞ、御前のような乞食坊主が大法丈に面会したいなどと身のほど知らぬたわけ者！ さつさと立去れ」と取り合つてくれない。

しかし、そんな事に負ける求願ではなかつた。追い払えば、追い払うほどテコでも動かず、ぜひにと面会を求めて止まなかつた。さすがの役僧も、これにはホトホト閉口して、ついに祐天に取り次いた。求願が来たという言葉に、さすがの祐天も顔色がサツと変つた。

「どんな様子をして来たか」と役僧に訪ねた。

「乞食坊主の風態です」と役僧が答えた。

「それならば俺の紫の衣があるからそれを着せて通せ」と役僧に命じた。

役僧は祐天の言葉を求願に伝えたところ、求願はカラカラと笑つて、「拙僧は貴殿の申す通りの真の乞食坊主に相意ござらぬ。何もそのようなりつばな衣を着たいために、ここに来たのではないそのような事は無用にしてもらいたい」といつて着なかつた。



塔養供和尚和願求